



# 三到図書館 ニュース

2008年10月発行  
No.63

J. F. Oberlin University Library

## 特集：図書館を利用してレポートを書く

外国語で文章を書く

### 英語で論文... !?

リベラルアーツ学群教授 中條 献

自分の母語ではない言語で文章を書くのがとても難しいという事実は、たとえば日本ならば、中学校で英作文の授業が始まると、すぐに痛感することです。数行の文章を日本語から英語に直すだけでも大変ですから、ましてや、大学の期末レポートや卒業論文といった、まとまった量のある文章を英語で書くなど、考えるだけで頭が痛くなる話です。以下においては、私の経験から、英語（ここでは英語に限らず、非母語と理解してください）で論文を書くことについて、思いついたままを書き連ねることにします。

大ざっぱにまとめてしまえば、論文とは、テーマにもとづく主張があり、その主張を提示する結論部に向かって、手順を踏みながら議論を進めていく文章といったところでしょうか。つまり、そのような文章で重要なのは、全体の構成が明確であることだと思います。さて、文章構成の重要性を理解したとしても、これを英語で書くことが一苦労なのですが、楽な近道はないというのが私の結論です。なんだか気の遠くなるような話ですが、まず、四苦八苦しながら、（たとえポロポロであっても）英語の文章をひねり出し、その文章を、英語を母語とする人や堪能な人 かつ、とても親切で辛抱強い人 に丁寧にチェックしてもらおう。そして最も重要な点は、直してもらった部分について、自分で丹念に見直すことです。自分が書いた「変な文章」と、添削された文章を比べて、何が異なるかを探り、次に文章を書くときの参考にする。これをひたすら繰り返すということなのですが、やはり、こうして書いていても地道で「つまらない」方法だと思います。

というわけで、もう少し楽な方法として試しても良いのは、効果の有無はともかく、英語で文章を書くときの「環境」を整えることでしょうか。一番良いのは、その言語が用いられている地域で書くこと。日常生活で自分もその言語を話さなくてはならず、周囲もその言語しか用いていない。これは留学中ならば、そのような環境にあることが多いでしょう。でも、日本にいる場合は…。それならば、英語の音楽を流し、英語の雑誌や本を手許に置いて、ちらちらと眺める。もちろん、英語の文献を用いる事は、いうまでもありません。

私は今この原稿を、アメリカ合衆国の首都ワシントンDCにある、米国議会図書館で書いています。先ほどまでは、学会発表で使う英語の原稿を執筆していたのですが、世界有数の蔵書数を誇る図書だけでなく、様々な歴史の原資料を所蔵し、さらには、インターネットを通じて膨大な数のオンライン雑誌や歴史史料に触れることができ、周囲を見渡せば、利用者も一心不乱に本を読み、ノートパソコンに向かい、なおかつ静寂に包まれた環境。日本にいるときよりも、原稿の進み具合が速い（と 思いたい）です。

最後に一つ。実は、自分の母語で論文を書く力を身につけることが、何よりも非母語の論文執筆に役立つ「近道」かもしれません。



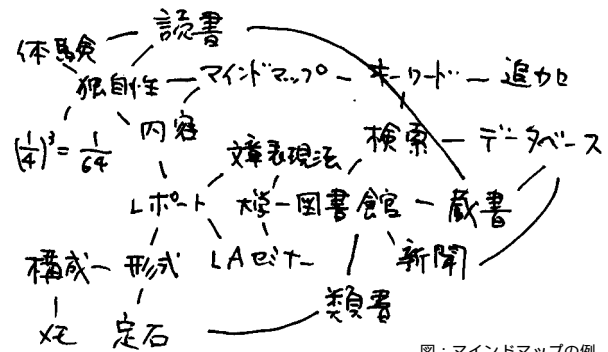
## マインドマップによるレポート内容の検討

リベラルアーツ学群准教授 森 厚

今回は、ちょっと違った角度から、レポートの内容について検討しましょう。大学の教員が学生にレポートを課するとき、多くの場合、その学生独自の視点を求めています。学生にとってみると、そこは苦痛です。他の人と違うところを見せようとしても、なかなか独自の視点は思い浮かびません。でも、4人に1人ぐらいが思いつく視点だったら、自分の中にもありそうな気がしませんか？そんな平凡に近い視点を大切にすべきだと思います。例えば、4人に1人の視点を2つ盛りこむことができれば、16人に1人、もう1つ盛りこむことができれば、64人に1人の特色あるレポートができそうです。こんなレポートができれば、とても面白い内容になるでしょう。

では、4人に1人の自分なりの視点を見出すにはどうしたらいいのでしょうか。皆さんは、まだ、「そこが難しいんじゃないか！」と思うでしょう。でも、皆さんは、それぞれの人生を20年程度以上過ごしてきている訳です。「独自の視点」や、そのための鍵は、皆さんの中にゴロゴロ転がってるはずですよ。むしろ、問題は、それをどう引き出すか、だと思います。

そこでお勧めしたいのが、「マインドマップ」を作ること（マインドマッピング）です。マインドマップは、頭の中にあるものを意識的に引き出す方法です。具体的な作成方法を説明してみましょう。まず、紙と筆記用具を用意します。そして、紙の中央にテーマとなるキーワードを書き込みます。後のルールは簡単で、関連するキーワードを、思いつくまま書き込み、関連するキーワードを線で結ぶのです。ただそれだけです（図：マインドマップの例）。実際にこの作業を繰り返すと、頭の中にあったものが見えるようになり、それがヒントになって、より多くのキーワードを頭から引き出すことができます。



図：マインドマップの例

ところが、そんな貴重なキーワードも、思いつきだけではレポートに書くには十分ではありません。そこで、図書館で知識を深めましょう。図書館のOPACや新聞のデータベースで、選んだキーワードによる文献検索を行ってみましょう。そして、実際にその書籍や新聞記事を読んでみましょう。レポートの内容を補強する様々な知識を仕入れることができるはずですよ。また、書籍や新聞を読んで新たなキーワードに巡りあったら、それもマインドマップに書き入れましょう。どんどん世界が広がり、レポートの内容も深まってくると思います。

今回は、レポートの内容について検討してきました。「マインドマップ」「4人に1人を3つ盛りこむ」「マインドマップのキーワードを図書館で検索する」といったアイデアを3つ盛りこんだので、きっとこの文章は独自性のある文章になったのではないかと自負しています。



読者に理解してもらうために

## 平易な言葉で詳細に

リベラルアーツ学群准教授 藤川まなみ

現場に行くこと、専門用語をなるべく使わないこと、なるべく詳細に書くこと。私は文章を書くにあたって、この3つを心がけています。

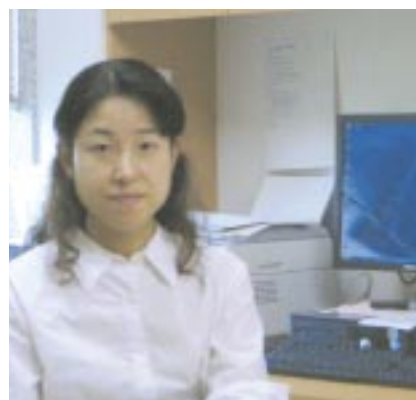
私が専門に研究している環境社会学、労働社会学は、現場に行き、観察することからはじめます。理論で攻める学問と違って、事実を詳細に知らない限りには、何一つ書けないのです。博士課程では大学院で環境社会学を、掛け持ちで所属していた研究所で労働社会学を研究していました。双方で、現場に行くことを常に意識させられました。研究所ではアンケートデータからわかったことを会議で発言しても「現場に行って確認したのか」、「本当に現場からみてそういえるのか」といつも質問されました。大学院の方でも、指導教官はゼミ報告であっても現場に行くべきという信念を持っていました。今でも机上のことを言うと怒られるのではないかと思うくらいです。

次に専門用語はなるべく使わないということは、修士のときの経験からです。「専門用語ばかりで書かないようにね」と、当時の副査の法律の先生から指導がありました。私は環境科学研究科に所属していましたが、法律の先生は研究科にいらっしゃらず、非常勤でいらしている先生に副査をお願いすることになりました。当時の私の研究は社会学、医療、法学の3領域にわたる学際領域の研究でしたが、研究科の都合で、論文の審査は医学の先生のほかは自然科学の先生でした。修士論文では専門用語には詳細な解説をつけ、口頭質問用のレジメには専門用語をなるべく使わないことを試みました。その後、私は博士課程に進学しても学際領域で研究をすることになりました。さまざまな領域の方が読んでもいいように、専門用語はなるべく使

わないようにするという経験は今でも生きています。

最後のなるべく詳細に書くことは、大学時代に遡ります。大学生の頃、私はマスコミを志望する学生同士の研究会に所属していました。毎週、マスコミで活躍していらっしゃる先輩が授業をしにきてくださいました。毎回30分で小論文を書くことから授業が始まります。書き出しがあいまいな論文は読んでもらえません。読んでもらうには興味を持ってもらえるように、詳細な内容から書きなさいと指導していただきました。カメラワークで言うのなら、対象に近づいて映し遠ざかって全体を見せるというのです。このことは今においても、現場に行って詳細なことを知ったうえで、書いていくことにつながっています。

現場の時間を有効に使うには事前学習が必要です。事前学習では事実をきちんとおさえることが必要のため図書館の新聞資料データベースを活用することになります。学生のみなさんも研究で現場に行くことになったら、ぜひ図書館で事前学習をされるとよいと思います。



## 「印刷時代末期」の遠隔学習

大学院准教授 鈴木 克夫

『ライティングスペース』という本の冒頭で、著者ジェイ・デイヴィッド・ボルターは、ヴィクトル・ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』の一説を引用しながら、「神父は[右手でテーブルの上に開かれている本を、左手で窓の外に見える巨大なノートルダム教会を指差しながら]“Ceci tuera cela”(この本がああ建物を破壊するだろう)と言う。(中略)コンピュータのキーボードから目を上げ、書棚に並ぶ本を見上げるとき、『これがあれを滅ぼす』のだろうか、と考えないわけにはいかない」と述べている。印刷書籍(その象徴がグーテンベルク聖書である)と文字使用の普及が教会の権威を掘り崩したように、いまやコンピュータ・テクノロジーが印刷書籍にとって代わろうとしているというわけである。

私の学生時代、図書館とその膨大な蔵書は大学のシンボルであり、教会の権威にも似た威厳を醸し出していた。大学院生になった時、教授に引率されて学部学生の立ち入りが許されていない図書館の上層階を案内され、未整理のまま無造作に積み上げられている19世紀欧米の書物の山にこれから自分が踏み込む学問の世界の深淵を見たように感じたものである。やがてそれらの文献もデジタル化され、インターネット上で読める日が来るのだろうか。

しかし、ボルターは、われわれは現在「印刷時代末期」、すなわち印刷書籍から電子書籍への端境期にあるとも述べている。つまり、インターネットで入手できるデジタル情報とインターネットでは入手できないアナログ情報が混在しているということである。それでも、図書の検索システム(OPAC)やオンライン・データベースなどの意義は大きい。それがない時代、われわれは図書館に通い、カード式の蔵書目録を一枚

一枚めくりながら、レポートや論文執筆に必要な参考文献リストを作り、せっせとコピー取りをするのが日課だったのが、いまや、図書館の蔵書はOPACで検索できるし、他大学や公共図書館の蔵書も文献複写サービスを利用して入手できる。データベースから本文を直接ダウンロードできることも少なくない。このことは、とりわけサテライトキャンパス(本学にも四谷キャンパスがある)や通信教育(本学大学院にも通信教育課程がある)など、大学図書館から離れて学ぶ遠隔学習者にとってそのメリットは計り知れない。さらに、通信教育で学ぶ学生には、郵送による図書の貸出・返却サービスやコピーサービスも用意されているのである。

端境期とはいっても以前に比べれば比較にならないくらい便利になっているはずだが、遠隔学習者はそれを有効に活用しているだろうか。遠隔学習を成功させるためには、印刷時代末期を生きる技術を身につけることもたいへん重要である。コンピュータを起動し、OPACやデータベースにアクセスし、図書館の各種サービスを利用することを日課にしてもらいたい。





## 異文化のフィールドワークから考える

リベラルアーツ学群教授 奥野 克巳

少し前に、本学で、学生のマナーの向上をめぐる議論が行われたことがあります。その発端は、図書館で借りた本を、期日を過ぎても返却しない学生（および教員）が増えているということでした。学生のマナーが低下してきている、大学をあげてなんとかしなければというのが、その議論のベースにはあったようです。

ここでは、その議論自体には踏み込まず、わたしたちが当然と思っている「借りたものを返さなければならない」というルールに、文化人類学における異文化のフィールドワークの観点から触れてみたいと思います。マレーシア・サラワク州（ボルネオ島）の狩猟採集民・プナン（Penan）社会には、もともと「借りる」という概念がありませんでした。近年、それが、外部社会から取り入れられたことが、ここ数年わたしが継続して行っているフィールドワークから分かってきました。

プナン語には、「借りる」という言葉がありません。誰かにお金を借りなければならなくなったら、プナン人は、「お金をちょうだい。帰る（返す）から」という言い方をします。つまり、お金をもらっておいて、「それを返す」（それが帰る）という言い方になるのです。

なぜ、プナン社会には、「借りる」という固有表現がないのでしょうか。そのことは、狩猟採集という彼らの生存戦略に関わっています。いまから1万年ほど前に、人類が農耕を開始する以前は、ヒトは長らく、獣を狩り、植物を採集して、それらを生きる糧としていました。プナン人は、今日でも、そのような人類古来の生業にたよっています。そうした暮らしでは、生きてゆく上で必要なものは、すべて周囲の自然のなかから調達します。食糧としての動物肉や植物などは、周囲の自然からもち帰ってみなでシェアするのです。

プナン人の暮らしでは、必要なモノは、周囲の自然のなかからあり余るほどあるため、彼らは、誰かからモノをほとんど「借りる」ことなく過ごしてきました。そこでは、貸し借りする必要がなく、それゆえに、「借りる」という概念が生まれなかったのだと考えられます。外部社会が持ち込んだ「借りたものは返さなければならない」というルールも、プナン社会では、いまだに希薄です。しかしながら、フィールドワークをつうじて、「貸し借り」の概念や言葉がないという

事態は、わたしにとっては、とてもショッキングでした。

フィールドワークをしばらく続けると、プナン社会では、「借りる」という概念や言葉だけでなく、わたしたちにとっては、ごくあたりまえのものが無いことに気づきます。「手の指のうち薬指だけに名前がない」「東西南北の方角の概念がない」「時間の観念がない」「反省心がない」など。そのような異文化でのフィールドワークの経験をつうじた発見は、「身体部位の名づけ方」「道の歩き方」「時間」「反省」などといった、人間の行動や思考のあり方に関して、根本から考えてみるためのきっかけを与えてくれます。

ところで、机を離れて行うフィールドワークでは、どんな些細なことでもメモをしておくことが大切です。書き留めておいたものをのちほど読み返してみ、新たに気づくことがたくさんあります。わたしが、プナン社会で「借りる」という概念や言葉がないということに気づいたのも、フィールドノートをあとから読み直したからでした。異文化におけるフィールドワークでの観察と記録は、彼らのあたりまえとわたしたちのあたりまえとの間を行きつ戻りつしながら、文化について、人間の行動や思考について考えるための貴重な材料を提供してくれます。

ここでは、（図書館ニュースなのに）図書館を離れて、異文化でフィールドワークを行うことばかり話してきました。しかし、「脱・図書館」というのが、言いたいことではありません。フィールドワークをつうじて、異文化の人びとの行動や考え方の不思議さに出あえば出あうほど、興味関心をもった事柄について、図書館でしらみつぶしに文献にあたらなければならないという感覚が、



しだいに自らの内側から沸きあがってくるはずです。

## 図書館と私

## 図書館を賢く活用するには

リベラルアーツ学群2年 小川 杏奈

レポートを書くとなると大活躍するのがインターネット。しかし、どこかのサイトの文章をコピーして貼り付けるようなことはしない。まずはレポートのテーマに沿った本や参考になりそうな本をインターネット上で検索する。次に本をいくつか選んでから、三到図書館のホームページへ。図書館内の蔵書検索をして蔵書があれば、わざわざ書店に買いに行く必要もなくなる。借りたい本のタイトル、番号、何階にあるかをメモしておけば、授業前や放課後のちょっとした時間で必要な本が手に入る。新聞記事の検索や学術検索もできる図書館ホームページは私にとってなくてはならない存在だ。

小学生のころから毎日のように図書室に通って、たくさんの本を読んできた。そんな私にとって、大学図書館に通うことは大学生活の楽しみのひとつ。リベラ

ルアーツセミナーの図書館見学ツアーに行く前から一人で図書館に入って迷ったり、何を目印に本を探すのか教えてもらったりと自分から図書館を知ろうとした。図書館と聞くと難しい本しかないとか、普段気軽に行けるような場所ではないとか、そんなイメージがあるけれど、専攻に関係する本や趣味の本が図書館のどこにあるのかわかってくると、もっと見たい、知りたい、読みたいと思うようになる。はじめは入りにくいかもしれないけれど、せっかく大学図書館に自由に入れるパスポート、学生証を持っているのだから、多くの学生に図書館を使ってほしい。

図書館に直接行かなくても蔵書検索ができたり、借りている本を確認できたりと、いろいろなサービスが図書館から提供されている。レポート作成がある限り、本探しは大学生の宿命。手間と時間を省いて、効率よく図書館を使いこなそう。図書館ツアーで教えてもらったことを復習して、図書館の使い方をよく理解することも、賢い図書館利用者への道だ。



2008年度  
桜美林大学図書館  
読書運動  
プロジェクト  
報告



みなさんは、3階入口付近のラックにお気づきでしょうか？

今年の春より、図書館本館の3階入口付近、レファレンスカウンター横に、読書運動プロジェクトのラックが設置されました。こちらには、読書運動プロジェクトの学生メンバーがおすすめる本が、学生たちのおすすめコメントつきでディスプレイしてあります。もちろん、このディスプレイを見て気に入った本があれば、すぐにそのまま借りていくこともできます。学生たちのおすすめ本の紹介は、イラストなども描かれていて、読書意欲や興味をそそるものばかりです。そして、日々その数は増え、ディスプレイもにぎやかに鮮やかになってきました。足を止めて見入っていたり、どの本を借りていこうかと迷っている・思索している学生の数も増えているように感じられます。この学生メンバーたちのおすすめ本は、(個人的に気に入っている本をランダムに紹介している、というようなことではなく、)季節ごとにテーマを決めて、それにあわせて紹介しているとのこと。今年の春は「新入生におすすめる本」、夏は「(涼しくなる)ホラーとミステリー」、秋は「(冬に向かって)こたつで読みたいくなる本」、とのこと。この先は、どんなテーマでおすすめる本が紹介されてくるのでしょうか!? 本好きのみなさんにとっては目が離せませんね…

2006年から始まった読書運動プロジェクトも今年

たちの活動もより活発になってきた感があります。メンバーたちは、火、水、金のお昼に集まって、次の読書会ではどんな本をみんなで読んでみようか、ですとか、図書館のおすすめ本のディスプレイで紹介する本を選んでポップを書いたりして、読書会は5時限目などに行なっています。

この春学期に行なわれた読書会には、10名を超える参加があった大きな読書会として、吉本ばななの『キッチン』、梨木香歩(なしきかほ)の『西の魔女が死んだ』を読んで語って議論した読書会がありました。また、もう少し規模の小さなものでも、ワーキングブアや格差社会など現代の社会問題にも共通するところがある、と巷で話題になっている、小林多喜二の『蟹工船』を読んでみたり、太宰治の『斜陽』、アルベール・カミュの『異邦人』などを読む読書会もやりました。そのほかの活動としては、三島由紀夫の『春の雪』のビデオを觀賞したり、鎌倉・江ノ島で文学館等を訪ねて散策したり、部誌を作ってそれぞれの思いを語ったり、と充実した学生生活も送っているようです。

そして、秋学期には、昨夏から秋にかけて行なわれた桜美林コメント大賞や、作家を呼んでの講演会(誰がやってくるかはお楽しみ!?)等を企画しているようです。

一方また、読書運動プロジェクトの立ち上げ人の1人である片山博文先生を筆頭に、ゼミのメンバーと読書会を行なっている先生も、桜美林のキャンパス内には結構いらっしゃるようです。このキャンパスの中に読書会の輪がさらに広がっていくことを願い、図書館としてもそれを応援していきたいと思っております。

[これを読んでおすすめる本コーナーに興味を持った方は、図書館3階の読書運動プロジェクトのラックをぜひ見に来てください。また、読書会に参加したい、読書運動プロジェクトの活動に参加したい、という方は、下記メールアドレスまでご連絡いただくか、カウンターでおたずねください。]

dokusho1@obirin.ac.jp (情報サービス課 三上 彰)

2008年度 前期報告

## 図書館ガイダンスについて

今年度は、4月初旬のオリエンテーション期間中に、まず、健康福祉学群、総合文化学群、大学院の新入生を対象に図書館のオリエンテーションを行ないました。4月下旬から7月にかけては、LA学群では、1年生の『リベラルアーツセミナー』の授業の中で、BM学群でも、1年生の『ビジネスの基礎』の授業の中で、図書館のガイダンスを行ないました。今年度は、LA学群が73クラス、BM学群が25クラスと、これだけで約100クラスになりました。

そのほかに、『文章表現法』の授業や、国際学部や健康福祉学群等の3・4年生のゼミの中でも、ガイダンスを行ないました。これらは、担当の先生やゼミの要望に応じたかたちのもので、図書館の各フロアのコーナーにどのような資料があるのかをじっくり時間をかけて巡る館内ツアーから、ゼミ論・卒論の材料・資料探しのデータベース検索・情報検索に重きを置いたものまで様々でした。

私たち図書館のスタッフは、みなさんに、図書館で持っている資料や、図書館で提供しているデータベース等に興味を持ってもらい、まずは図書館に足を運んでもらえたらと願っています。そして、学生生活の中で、レポートや課題、ゼミ論・卒論のための材料探しといったことだけでなく、将来の進路を考えたり就職活動をする際にももちろんのこと（資格・就職に関する本を集めたコーナーや、日経新聞のデータベースは特におすすめです）、サークル活動やみなさん個々人の趣味・教養、知的好奇心を満たすためにも、図書館をぜひ積極的に利用していただきたいという思いで、図書館の利用方法、活用法等について案内させていただいています。



そうは言っても、限られた時間（通常は授業の時間1コマ分：90分）の中では、「こういうところをもっと知っておいてほしいな・・・」と思うようなことだけでも、伝えきれなかったというケースもあります。ささいなことでも疑問に思うことがある場合には、ガイダンスの際でも、後日図書館に来館した際でも、ぜひ気軽に質問してください。

また、ガイダンスを担当していると、学生のみなさんからの質問や、説明をした際の反応から、逆に学生のみなさんから教えられることや、次回はもっとわかりやすく説明できるように工夫しよう、もっとこういうことを勉強しておかないといけないかな、等々と色々と考えさせられるところもあります。

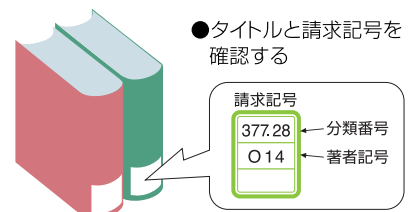
インターネット万能と言われるような時代になっても、図書館の資料には、インターネットで調べただけでは得られない有益な情報もたくさん含まれています。みなさんには、図書館を有効に活用して、充実した学生生活を送っていただきたいと思います。桜美林大学の卒業生は、登録することによって、卒業後も図書館を利用することができます。卒業した後も、資料探しなどで困ったことがあれば、まず母校の図書館に戻ってきて、探してみても、そして、図書館のスタッフにたずねてみて下さい。（情報サービス課 三上 彰）

## 大学図書館【中級編】本の並びについて

図書館の本は背にラベルが貼ってあるのはご存知ですか？これは請求記号と呼ばれるものですが、本の並び順を表します。請求記号は3段になっていて、上の段にNDC（日本十進分類法）による分類番号（「140」や「913.6」など）が記されています。中段は著者記号といってアルファベットと数字（「N58」や「Sh12」など）からなります。下の段には巻数を表す数字や年次を表す数字（「3」や「2008」など）が記入されています。この請求記号にしたがって本は左から右、上から下へと並びます。

では、NDCについて簡単に説明しましょう。これはNippon Decimal Classification（日本十進分類法）の略称ですが、主題を表します。図書を1～9の9つの主題に分け、それに総体を表す0を加えて10個の「類」とします。それぞれの類をさらに9区分し、それに0の総記を加えて10個の「綱」とします。各綱を同じように分けて10個の「目」とします。このように主題を細分化していきます。この分類番号にしたがって本を並べると同じ主題のものが集まることとなります。

【類】	【綱】	【目】
0 総記	10 哲学	110 哲学各論
1 哲学	11 哲学各論	111 形而上学, 存在論
2 歴史	12 東洋思想	112 自然哲学, 宇宙論
3 社会科学	13 西洋哲学	113 人生観, 世界観
4 自然科学	14 心理学	114 人間学
5 技術	15 倫理学, 道徳	115 認識論
6 産業	16 宗教	116 論理学, 弁証法, 方法論
7 芸術	17 神道	117 価値哲学
8 言語	18 仏教	118 文化哲学, 技術哲学
9 文学	19 キリスト教	119 美学



『日本十進分類法』は、1929年に初版が刊行されました。その後時代の変化と共に改訂がなされ、現在は9版となっています。本学図書館は整合性を保つため第8版を採用しています。

このNDCは大学図書館だけでなく、小学校の図書館や公共図書館などいろいろな図書館で取り入れられています。文献を探す時の目安にしてください。（情報サービス課 矢部 知美）



## 『四谷キャンパス図書室』の紹介

『三到図書館ニュース』No.62でお伝えした四谷キャンパス図書室について、その後の状況をお知らせいたします。

四谷キャンパス図書室は、国際学研究科、大学アドミニストレーション研究科、老年学研究科の大学院生と教員に向けて、図書や雑誌の貸出し、オンラインデータベース利用、自習空間の提供と、いろいろな図書館サービスを提供しています。平日は午前10時から午後9時45分まで、土曜日は午前10時から午後9時15分までオープンしています。授業がある日曜日もオープンしています。



現在、蔵書冊数約6,000冊、学術雑誌約50タイトル、新聞7タイトル、その他紀要（学術論文集）類を利用者に提供しています。このほか、大学院の学習環境整備のため、新宿キャンパスにあった図書や雑誌に加えて、大学院の専攻に関連した図書・雑誌の一部を町田キャンパス本館から四谷キャンパス図書室に移しました。また新しい参考図書や新刊書籍・雑誌の受入を進めるなど、少しずつ書架の充実を図っています。とは

いえ大学院生が学習や研究のために必要とする資料は、学部学生よりもずっと多く、まだまだ資料を充実させていくことが必要です。

図書室の奥には学習用のPCルームがあり、授業の空き時間などを利用して、多くの大学院生が利用しています。従来とは異なり多くの学術資料が電子化され、国内の学術研究成果がインターネットで公開されるものが次第に増えてきています。図書館先進国であるアメリカや欧米の学術研究成果は、紙の本や雑誌で閲覧するよりはインターネットで検索・閲覧することが、すでに当然になっていますので、多くの大学院生がPCルームを積極的に利用しています。



利用状況については、オープンしてから徐々に入館者数も増加してきており、時間帯については、午前中より午後から夕方にかけて、入館者数が増えていく傾向にあります。

現在、大学院生や教員からいろいろな意見や要望が図書館に寄せられています。すぐにでも解決できることや、あるていど時間をかけなければならないことなどいろいろですが、大学院教育の重要な場所としての図書室利用について、図書館として今後もできるかぎりの努力をしていきます。

（事務課 佐々木 俊介）

## 2007年度 よく読まれた図書

順位	資料名	著者名	回数
1	366.38/L51/K 子どもを喰う世界	ピーター・リーライト著/さくまゆみこ、くぼたのぞみ訳	21
2	366.38/H42 児童労働：廃絶にとりくむ国際社会	初岡昌一郎編	18
3	367.225/Sh11/H 花嫁を焼かないで：インドの花嫁持参金殺人が問いかけるもの	謝秀麗 著	17
4	689.3/Sh93 ディズニールランドの人材教育 改訂版	志澤秀一著	16
4	370/Te58 国際教育協力を志す人のために：平和・共生の構築へ	寺尾明人、永田佳之編	16
4	933/Sa53/R ライ麦畑でつかまえて（白水Uブックス:51）	J.D.サリンジャー [著]/野崎孝訳	16
4	933/R78/H1 ハリー・ポッターと謎のプリンス 上	J.K.ローリング作/松岡佑子訳	16
4	913.6/A71 図書館戦争	有川浩著/徒花スクモイラスト	16
9	816.5/Y86 大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版	吉田健正著	15
9	377.15/H94 研究計画書デザイン：大学院入試から修士論文完成まで	細川英雄著	15
9	913.6/I68 アヒルと鴨のコインロッカー（ミステリ・フロンティア:1）	伊坂幸太郎著	15
9	913.6/Mo54 夜は短し歩けよ乙女	森見登美彦著	15
13	080/Se22/(20) 史記列伝（世界古典文学全集:第20巻）	司馬遷 [著]/小川環樹、今鷹真、福島吉彦 訳	14
13	807/E48/D 第2 言語習得の基礎	R・エリス 著/牧野高吉 訳	14
13	673.9/Sc8/S スターバックス成功物語	H・シュルツ、D・J・ヤング著/小幡照雄、大川修二訳	14
13	913.6/I68/J 重力ピエロ	伊坂幸太郎著	14
13	913.6/I72 1ポンドの悲しみ	石田衣良著	14
13	913.6/H55 容疑者Xの献身	東野圭吾著	14
13	913.6/Mi67 まぼろ駅前多田便利軒	三浦しをん著	14
13	913.6/A71 図書館内乱	有川浩著/徒花スクモイラスト	14

統計の結果をみると、2007年度は児童労働、社会的貧困、異文化、ジェンダーなど国際社会、国際協力に関する本がよく読まれたようです。今回の上位3冊以外の結果をみても、このジャンルの関連図書が多く利用されています。小説ではこの1、2年で話題になったものが多く読まれています。サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』は毎年上位にランクされています。ここでは圏外ですが、村上春樹の新訳版『キャッチャー・イン・ザ・ライ』も13回貸し出されており、この二つを合わせるとトップに躍り出てきます。この他にも、教員が指定する指定図書や資格就職本などよく利用される本もありますが、ここでは一般書架に配架されている図書を対象に統計をとってみました。さて、今年はどうな本が多く読まれているのでしょうか？



## 特集 アメリカ～カナダ図書館見聞雑記

図書館長 永瀬 順弘

この夏、8月3～8日まで、私は、アメリカ・シアトルのワシントン大学で行われた国際会議、Library Assessment Conference に公務として出席し、そのあとカナダの二つの大学を含め、4つの図書館を見学する機会を持つことが出来ました。私がアメリカを訪れるのは、今回が2回目です。初回は、今から25年も前のことで、アメリカ中西部にあるウィスコンシン大学に1年間学外研修で滞在し、Memorial Library や近接するState Historical Societyなどを大いに利用させていただき、アメリカの図書館の資料収集の底力といったことをいやと言うほど痛感させられました。さて、今回25年ぶりにアメリカの地を踏んで、図書館を中心に感じたことを以下にメモしておくことにしたいと思います。

日程の前半にあたるLibrary Assessment Conference は、2年に一度行われる国際的な図書館の評価会議で、図書館及びライブラリアン(Librarian)の質的な向上を目指す研修の意味を持つものようですが、今回はアメリカのみならず、世界から300名を超える図書館職員(アメリカ以外は1/4)が結集し、3日間、朝9時から午後5時まで、びっしりと組まれた報告(プレゼンテーション、通訳無し、英語のみ)と質疑が行われました。この会議に参加して先ず感じたことは、図書館の国際的な評価という観点からみると、日本での取り組みはまだまだかなり立ち遅れているのではないかと、ということでした。



ワシントン大学図書館入り口

日本でも、図書館員の研修では、様々な形で行われてきており、それはそれで重要な意義を持っているとは思いますが、国際的なレベルでの切磋・琢磨はまだこれからというのが実情のようです。事実この国際会議に日本から参加したのは、本学から図書館の石崎事務長と私、あとは慶応大学から2名、明治大学から1名の計5名のみで、未だ日本は国際的な会議への出席すらおぼつかない有様、というのが現状のようです。

次に、報告を聞いた時の感想になりますが、報告者のみならず、参加した図書館職員は、それぞれが専門職のLibrarianとしての自信と誇りを持っているようで、中でも出席者の3/4近くを占める女性が実に生き生きと仕事に励んでいるように思われたのが印象的でした。報告は、全てプレゼンテーションで、最早プレゼンの出来ない職員は問題にされないようにも思われました。

プレゼンの時間は非常に厳しく制限されており、それぞれが質疑を含め、時間を厳守するなかで、集中した議論が行われていました。質問時間は、10分程度のものですが、この限られた時間のなかで、4.5人が質問をし、活発な議論が展開されるという点でも、日本は見習うべきことが多くあるように思われました。今回、プレゼンの内容までは紹介出来ないのは残念ですが、コンピュータ技術を駆使したデータ作りが一段と深化してきていることを実感させられました。

先に述べましたが、今から25年前、私がウィスコンシン大学に研究員として1年間滞在していた頃は、日本では未だ蔵書検索も全てカードによる手作業になっていたかと思いますが、当時同大学では、カードによる検索方式と同時に、Referenceのカウンターでは、専門の職員が、コンピュータによる検索でILL(Inter Library Loan)などが自由に使えるようになっており、アメリカにおける情報技術の進歩に驚かされたものでした。日本における情報技術の本格的な展開は、1995年のWindows95の導入あたりからで、私の研修当時の日本は、アメリカに10年は遅れていた、と



プレゼンテーションと活発な質疑の様子

記憶しています。ところが、今や日本では、その後のコンピュータ技術の進歩は目覚ましく、殆ど、アメリカのみならず世界と肩を並べるか、それを追いつく勢いがあることは、日々私達が実感しているところです。それでも、まだ何か日本は遅れている面がある、というのが実感です。例えば、図書館を例に取ってみれば、先のLibrary Assessment Conferenceにも見られますように、コンピュータ技術を駆使した職員の研修と図書館の質的レベルアップが想像以上に進みつつあり、日本が国際的な評価やレベルへのキャッチアップは、未だ途上にあり、この点では日本は多くを他国に学ばなくてはならないように思われます。

さて、今回のアメリカ訪問では、先の国際会議への出席と同時に、図書館の見学という任務も担っており、限られた時間の中で、国際会議の主催校のワシントン大学の図書館をはじめ、シアトルの公共図書館を、また、次の訪問国カナダでは国際交流センターのパートナー教授と職員の松戸さんに同行して、ビクトリア大学図書館、バンクーバー・アイランド大学図書館の計4カ所を訪問しました。それぞれの図書館の内容について詳しく触れる余裕はありませんので、見学の中で感じたことを若干述べておきたいと思います。



ワシントン大学図書館の一部

いずれの図書館でも、とにかく広い空間と快適な勉強環境が整えられており、ワシントン大学や公共図書館などでは、夏休みにも関わらず、朝から多くの学生や市民が利用していることも分かりました。ビクトリア大学では、地階部分をドキュメント、新聞、マイクロフィルム、大型サイズの文献などを収容していることも注目され、湿気などが気になるところですが、空調設備はばっちりとして整えられているようでした。

またワシントン大学のような風格と伝統のある図書館は別としても、他の三つの図書館では、全部透明なガラスの窓が使用されており、しかも、簡単な飲食のできるCafeや売店などが、一階部分や地下に配置されており、学生達や市民が気軽に図書館に立ち寄れるような雰囲気をつくるために工夫が施されていました。透明なガラスが使用されているのは採光と眺望との関



ビクトリア大学・夏季語学研修の桜美林大学生との記念撮影

係かも知れませんが、日本の図書館では未だ例は少ないのではないかと思います。全面ガラス窓といったアイランド大学の図書館は、外観は日本のオフィスビルのように、実に殺風景で、これが図書館なのかと思われた程でしたが、中からの眺望は実にすばらしく、眼下には美しい海を見渡すことができる、これまで私が見学した多くの図書館のなかでも、随一と言ってもよいようなものでした。カナダらしく、大半が木製の書棚や机が並べられ、優しい雰囲気を醸し出していることも特徴でした。



総ガラス張りのバンクーバー・アイランド大学図書館

ところで、私が注目していたGoogle社が中心となってアメリカのハーバード大学やミシガン大学の図書館が進められていると言われる、全ての資料・文献をデジタル化した夢のDigital Libraryの実現ということですが、今回見学した図書館ではこの点は確認できず、依然として紙に書かれた資料、文献が大半を占め、デジタル化によって、全ての文献が図書館の書棚から消える日はそう簡単には来そうにないと感じました。とは言え、今日アメリカ国内で、また日本でもデジタル・アーカイブスを中心に、急速に文書・資料のデジタル化が急速に進みつつあることも事実であり、図書館についていえば、しばらくは、あるいはかなり長年に渡って、デジタルの世界とアナログの世界の併存の時代が続くのではないかと、というのが私の実感でした。